カオス*ラウンジ

01. 室内劇 se cure | 2019年

「セキュリティ」をテーマとした新作。2015〜2017 年に福島県いわき市で開催した「市街劇」を変奏し、「室内劇」として制作。会場内に配置された複数のテキスト(a~g)で構成されている。(引用：宮沢賢治『注文の多い料理店』、新潮文庫 国土交通省 HP「鉄道運輸規定の一部を改正する省令」)

梅沢和木

02.Summer clouds | 2019年

「雲 Cloud」と「群衆 Crowd」をモチーフにした新作。夏空に浮かぶ雲と、不吉な爆煙。祝祭に集う群衆と、災害にみまわれ避難する群衆。「クラウド」という音によって様々なイメージをつなぎ、災害と祝祭の風景を描き出す。

協力：新津保建秀
コミケ62における会場の写真(2002 年に Kobak 氏が撮影)を改変、使用
B-29号から撮影されたきのこ雲をニューラルネットワークによる自動色付け＋手動補正
https://twitter.com/hwtnv/status/1158516817721249792
Mushroom cloud over Hiroshima(Q55435471)を改変、使用
CC 表示 - 継承 3.0

磯村暖

03. เปรตไปม๊อบ (プロテストする地獄の亡者、ある時にはプロテストしたので地獄に落ちた亡者) ＋モク丸ヒト丸、dot0a、中川春香、他８名による地獄の亡者の彫像群 | 2019年

プラカードを持ってデモ行進しているのは、地獄の亡者たちである。タイの「地獄寺」では1970 年代以降に、このようなコンクリート彫刻による亡者像が定着した。亡者たちが掲げる抗議は、「罪」のレッテルを貼る側に対する異議申し立てであり、歓迎の言葉は、亡者たちが私たち似姿でもあることを伝えている。

宇川直宏

04.A Series of Interpreted Catharsis episode2 – earthquake | 2007年

筑波の地震研究所との共同制作で、1989年のサンフランシスコ地震（ロマ・プリータ地震）と 1995 年の阪神淡路大震災の揺れをシミュレーションし、写真と映像に記録した作品。科学的なシミュレーションと、物語的な演劇装置によるシミュレーションが重なり合う、新たな災害の表象。

大山顕

05.Firewall | 2019年

隅田川沿いにある「白鬚東アパート」は、高さ40mの棟が1.2kmにわたってつながっており、それ自体が巨大な「防火壁」となっている。関東大震災の火災で多くの人命が失われたことを教訓に作られたこの巨大ファイアウォールは、災害の記憶によって生まれた都市の風景である。

三上晴子

06.《Bad Art For Bad People》で使用された赤いケーブル | 1986年
所蔵：多摩美術大学アートアーカイヴセンター
ポートフォリオ | 1986年　所蔵：多摩美術大学アートアーカイヴセンター
Iron Plant | 1984-85年　所蔵：多摩美術大学アートアーカイヴセンター
（P3 art and environment より寄贈）

1984年から情報社会と身体をテーマとした作品を発表し、国内外で活躍してきた三上は、2015年1月に急逝。1986年の《Bad Art For Bad People》は、当時 NTT が大量に破棄した地下電話線を用いたインスタレーションで、本格的な情報社会化を目前に控えた都市の身体、神経網を表現した重要な作品である。本作はもう現存しないが、多摩美術大学アーカイヴセンターに保存されていた当時のケーブルをお借りし、展示した。

寺山修司

07.「市街劇ノック」地図 | 1975年　所蔵：株式会社テラヤマワールド

カオス*ラウンジ

08.「市街劇 怒りの日」地図 | 2015年

1970 年代に入って、寺山は「市街劇」という新たな演劇の形式を発明した。市街劇は「追放された百万人のびっこ、鍛冶屋、魔法使いたちを呼び戻し、そこに新たな出会いの機会を生成する」という寺山の演劇論を実践するものであり、現実の都市に虚構を重ね合わせることによって、想像力による現実への介入を試みた。市街劇「ノック」はその代表作である。カオス*ラウンジは、東日本大震災後の福島県いわき市を舞台に、寺山の方法論を応用して新たな市街劇をおこなった。被災地でおこなう市街劇は、震災後の現実に対する想像力による介入となり、災害、慰霊、復興といった文脈を抱えることになった。

カオス * ラウンジ

09. 東海道五十三童子巡礼図 | 2019 年

2019 年 7 月 18 日、京都市伏見区の京都アニメーション第 1 スタジオで発生した放火事件を受けて制作された絵画。現実と虚構（アニメ）を橋渡しすることに尽力した京都アニメーションに対して、虚構のなかに、現実の暴力（危険物）が持ち込まれてしまった。現実の暴力によって壊されてしまった虚構を回復し、虚構と現実の関係を問い直すために、東京と京都をつなぐ「東海道」と「善財童子」を描いた。制作は、藤城嘘と名もなき実昌が指揮を執り、15名の絵師たちの協力のもと進められた。

参加絵師：内田ユイ、梅ラボ、川上喜朗、ク渦群、cottolink、杉本憲相、都築拓磨、TYM344、名もなき実昌、宏美、藤城嘘、BeBe、堀江たくみ、三毛あんり、宮下サトシ、×口、mos

梅田裕

10.53 つぎ | 2019 年

床に並べられた白い座布団は、全部で 53 個ある。座布団のなかには、東海道の 53 箇所の宿場で採取された「土」が入っており、京都の方向へ向けて配置されている。※本作は、座布団の上を歩いていただくことができます（お砂踏み）。その際には、靴を脱いでくださいますようお願いします。

EVERYDAY HOLIDAY SQUAD（SIDE CORE）

11.RODE WORK | 2017 年
意味のない徹夜 | 2019 年

《RODE WORK》は、東日本大震災で津波の被害を受けた、宮城県石巻市のスケートボーダーたちと共同で制作した作品である。夜間道路工事現場の機材や照明と組み合わせた、一晩限りの工事現場のようなスケートパークで、作業服を着て滑るスケーターたち。そこにオーバーラップする防潮堤や工事現場の風景は、震災の傷跡であると同時に、そこが彼らにとっての「遊び場」であることを示している。震災と復興の狭間にあって、自ら表現の場を見出していく「ストリートの初期衝動」が、そこにはある。

会田誠

12. MONUMENT FOR NOTHING Ⅳ (2019 ver.) | 2012-2019 年

巨大な壁として立ち上がっているのは、東日本大震災で被災し、水素爆発を起こした福島第一原発建屋を描いたパネルである。よく見るとその表面は、東日本大震災と原発事故について言及した Twitter 上のさまざまな「つぶやき」によって覆い尽くされている。巨大な災害を目の当たりにした人びとがネット上に書きつけた、たくさんの「言葉」がそのまま「モニュメント」と化している。

ア　ヤ　　ズ

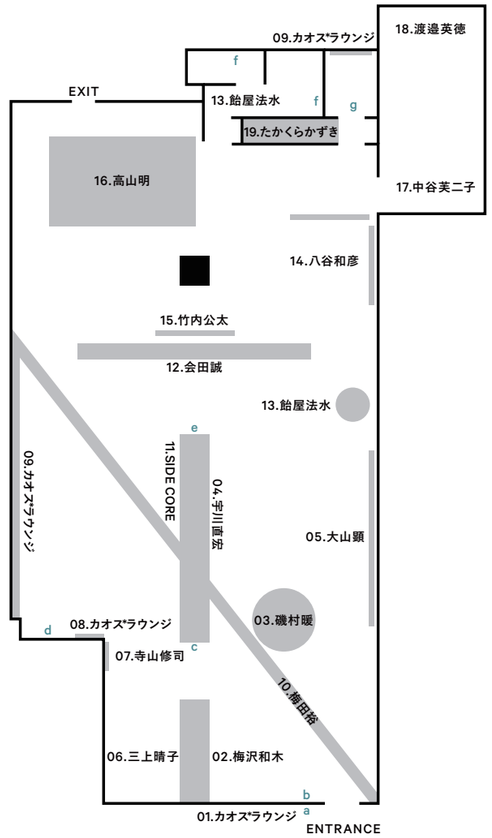
13.「　ニシ　　ポイ　　」| 2005-2019 年

今回、飴屋には「地下鉄サリン事件以後、一時的に制作を休止したことについて」というテーマで新作を依頼した。その結果、①会場の床と天井を110cm四方切り取る（東京拘置所の「落とし板」のサイズ）。②骨壷を持ち込む。③2005 年の「バ　　ング　　ント」展で発表した作品の再展示（椹木野衣が「サ　ラギノ　」名義で寄稿したテキストと、日本列島を消去した気象映像）。④1997 年 4 月 24 日の第 34 回公判における麻原彰晃の発言。⑤現在の上九一色村の風景。⑥飴屋法水自身が会場に居ること。主にこの 6 つによって構成される作品となった。6 つの要素は必ず全て揃うわけではなく、また会期中に変更される可能性もある。

設営協力：渋谷清道

SiteA「災害の国」

※本展は２会場構成です。Site Bの入り口は、銀座方面に25mほど直進した左手にあります。



八谷和彦

14. 見ることは信じること | 1996 年

1995年の阪神淡路大震災をきっかけにおこなった「メガ日記」プロジェクトをもとにした作品。「メガ日記」は、100 人が 100 日間日記をつけ、パソコン通信上で交換するというプロジェクト(実際には1回目は約140 名、2回目は約250 名の参加者があった)で、ニフティサーブやインターネットで日記が毎日収集・公開された。災害をめぐる人びとの言葉を、ネット上の「日記」という場所をつくることで可視化し、アーカイブした、最初期のメディア・アートの名作である。

竹内公太

15. 盲目の爆弾、コウモリの方法 | 2019 年

第二次大戦末期、日本軍は「風船爆弾」という特殊な兵器を開発し、アメリカ本土攻撃を試みた。和紙とこんにゃく糊などでできた風船は、劇場などの広い室内空間を利用して手作業で作られた。完成した風船爆弾およそ9300 発は、千葉、茨城、福島の海岸近くにある基地に集められ、空に放たれた。竹内は、ワシントンとシアトルにある国立公文書館の資料などを頼りに、風船爆弾が着弾した地を訪ね、この「盲目の爆弾」が見ることのなかった風景を、映像化した。

高山明

16. 個室都市東京 2019 | 2009-2019 年

「個室ビデオ店」や「ネットカフェ」を模したブースで見ることができるのは、街ゆく人びとへのインタビュー映像である。本作が最初に発表されたのは 2009年。ちょうどその 1 年前に秋葉原通り魔事件が起こり、「ネットカフェ難民」という言葉が話題になった。社会から疎外された人びと、居場所がないと感じる人びとの「避難場所」としての「個室」。今回は新たなインタビュー映像を加え、2019 年バージョンとして展示した。

中谷芙二子

17. 水俣病を告発する会――テント村ビデオ日記 | 1972年　所蔵：東京都写真美術館

1960年代後半に発売されたポータブルビデオカメラは、映像の撮影、編集、発表まですべて個人で行なうことができるという点で、世界中の表現者たちに衝撃を与えた。中谷は、この民主化された映像ツールである「ビデオ」を手に、東京のチッソ本社前で座り込みをする人びとのなかへ入ってゆく。中谷のビデオは、人びとの主張を代弁するわけでも、劇的なシーンを撮るわけでもなく、ただ「環境の一部」として、その風景を記録した。

渡邉英徳

18.「忘れない」震災犠牲者の行動記録 | 2019 年

渡邉はこれまで、「ヒロシマ・アーカイブ」や「東日本大震災アーカイブ」など、戦争や災害の被害者の記録を、デジタルアース上にアーカイブするプロジェクトを続けてきた。本作は、岩手県における震災犠牲者の「地震発生時」から「津波襲来時」までの避難行動をまとめたデジタルアーカイブである。渡邉は、本来は声も身体も持たないデータを紡ぎ、震災犠牲者の行動記録として可視化する。

たかくらかずき

19. 摩尼遊戯 TOKOYO 神仏習合 godda mix | 2019 年　開発：vitte

コンピュータ・ゲームの起源が「戦争シミュレーター」であることはよく知られている。たかくらはその死のテクノロジーを反転させ、「仏教シューティングゲーム」という新ジャンルを生み出した。プレイヤーの自機は仏僧であり、襲いかかる怨霊＝死者たちを、念仏によって成仏させてゆく。本作は、2015 年にカオス*ラウンジが開催した「市街劇 怒りの日」の出品作をバージョンアップしたものである。